

# 異文化コミュニケーション NEWSLETTER

No. 14

November 1992

INTERCULTURAL COMMUNICATION INSTITUTE  
KANDA UNIVERSITY OF INTERNATIONAL STUDIES  
1-4-1, Wakaba, Mihama-ku, Chiba-shi, Chiba-ken, 261 Japan

神田外語大学・異文化コミュニケーション研究所  
〒261 千葉市美浜区若葉1-4-1  
(Phone) 043-273-1233 (Fax) 043-272-1777

## 第二回幕張夏期セミナー

### 「日本の大学における異文化コミュニケーション論の研究と方法」報告

神田外語大学 異文化コミュニケーション研究所

今年度の幕張夏期セミナーは千葉市・幕張の海外職業訓練センター(OVTA)において、9月12、13、14日の3日間にわたり開催された。今回のセミナーは2回目ということもあってか、参加者も全国各地から50余名が参加し、異文化コミュニケーション論についての実践的な講義や、広範な視点からの議論が繰り広げられた。以下はセミナーの内容の簡単な紹介である。

12日は、神田外語大学教授の金東俊氏の「韓国と日本—ことばと文化の視点から—」と題する講演で始まった。その中で金氏は、韓国語と日本語を比較し、日本にある本音と建前の概念は、韓国には少なく、あるのは儒教的価値観に基づく倫理性であることや、敬語用法の軸となるものが韓国では年齢であり、たとえ身内であっても年上の者には敬語を使う必要があること等を示唆するなど、豊富な事例を交えながら、韓国語が日本語とは異なる発想法を基盤として成り立っていることを説明した。また、韓国文化と日本文化を対比して、建物、着物、履物等の事物や人間関係からみて韓国文化は「曲線文化」であり、日本は「直線文化」であると主張し、日本人のコミュニケーションには「直線文化」から来る衝突を回避するために遠回しや婉曲表現が多いことを指摘した。最後に、金氏は今後、文化と密接な関係のある言葉の研究者とコミュニケーション研究者の共同研究が必要であることを示唆し、講演を終えた。

第2日目は、参加者が各々選択した3つのセッションに分かれ午前の2時間半、午後の2時間半の計5時間にわたる講義を受けた。セッションAは南山大学教授の岡部朗一氏による「政治コミュニケーション」についての講義であった。同氏は南山大学でのコミュニケーション関連科目や、その位置づけ、セミナーでの「政治(説得)コミュニケーション」の授業の進め方を紹介し、アメリカの政治コミュニケーションを日本人の眼で見るといふ異文化の視点から、特に大統領候補者の選挙演説の中にあらわれる、言語・非言語を通しての説得レトリック

クの手法を詳述した。具体的には、アメリカ人が建国以来信奉している政治イデオロギーと価値観が、伝統的な儀式コミュニケーションの中でいかに継承されてきたかを検討し、就任演説、弁明演説、テレビ・ディベート、戦略的沈黙といった典型的な政治コミュニケーションのジャンルについて講義した。最後に、1992年7月に行われた民主党大会でのゴア副大統領候補の受諾演説を解説し、参加者にその模様を映したビデオを上映してセッションを終えた。

セッションBは広島大学助教授の上原麻子氏が「Cross-cultural Adaptation」というタイトルのもと、講義を行った。同氏はまず、広島大学で行っている授業の概要を説明し、その後、対人コミュニケーションと文化、カルチャー・ショック、異文化適応、異文化学習過程等の用語とその定義について講義し、諸理論、先行研究の問題点等を指摘した。また、先行研究にもとづきながら異文化学習過程において不適応現象の多位相性と時間的な変化について述べた。後半には、カルチャー・アシミレーターを用いながら異文化コミュニケーションの目的や、異文化適応の必要性について参加者と共にディスカッションを行い、最後に、学生に対して他者に対する共生的な理解を促すよう指導していくことの必要性について触れ、活発な質疑応答をしてセッションを終えた。

セッションCは奥羽大学助教授の渡辺文夫氏が「多極的異文化接触論」と題したワークショップを行った。渡辺氏はまず、上智大学外国語学部の「アジア文化交流論」、早稲田大学理工学部の「総合科目(輪講):国際化と異文化理解」の基本的な講義デザインとそこで取り上げた課題について述べ、日本対アメリカという従来2極的になりがちな視点に批判を加え、アジアを視野に入れた多極的な視点を育成するための教育方法について参加者と討議を行った。具体的には、文化の定義、異文化接触とその問題点、欧米人と接触する際の日本人の問題点、他のアジア人と接触する際の日本人の問題点、多極的視点に基づく異文化接触への認識、そして多極的異文化接触戦略等について参加者も交えての熱のこもった討論がなされた。

夜には、ディスカッション、シミュレーション・ゲーム、ビデオ鑑賞と3つの異なったセッションが開かれ参加者は各々自分の関心のあるセッションを選び、参加した。ディスカッションは「異文化コミュニケーション論

の核心を探る」と題して行われ、文化とコミュニケーションの関わりや、異文化コミュニケーションとは一体何か、さらには教育において理論的なものを重視するか、実践的なものを積極的に取り入れる必要があるのかなどをきわめて活発な討論がなされた。

「シミュレーション・ゲームの実践と評価」のセッションでは、まず BARNGA と呼ばれるゲームを参加者全員で行い、その後参加者のゲームについての感想を交えながら大学教育において体験学習を導入する意義、具体的問題点等について討議した。

「異文化コミュニケーション教材としてのビデオ」のセッションでは、アメリカで制作されたビデオや、NHKの番組、異文化コミュニケーション研究所の試作品等を観賞し、その後参加者全員でビデオ教材導入の問題点や意義、そして、いかなるビデオ教材を開発する必要性があるか等について討議した。

最終日はハワイ大学助教授で放送教育開発センター客員研究員の、Michael R. Ogden 氏が “Living with Uncertainty: Experience of Intercultural Adaptation” と題した講演を行った。Ogden 氏は、中東への旅行、米国平和部隊隊員として派遣されたフィジー諸島での体験など、自身の豊富な異文化体験を交えながら、異文化における適応のあり方を「サーフィン」に喩えて説明し、訪問者として異文化を訪れる際の不安感や、対応能力におけるバランス感覚の重要性について語った。また、平和部隊で派遣前に受けた異文化訓練の様子などについても語り、如何なる訓練も完璧というわけではなく、現地に滞在してからの対応能力と心の持ち方及び柔軟な態度が大切であることを強調して講演を終えた。

最後のセッションでは、各ワークショップの参加者の代表が交代で自分の参加したワークショップの内容について紹介した後、一部の参加者にセミナーに参加した感想と今後の要望を述べてもらい、セミナーを終了した。

以上、3日間のセミナーの内容を簡単に紹介した。日本の大学のカリキュラムの中では比較的新しい科目である異文化コミュニケーション論であるが、その教育と方法というきわめて具体的な内容を取り扱うセミナーを今回も行うことができたのは、なんと言っても授業の方針・内容や実際上の問題点について積極的に自己開示して頂いた講師の先生方の御好意の賜である。このように、教員が全国から集まり、授業方法、内容等についての情報交換や相互啓発の場を持つことの重要性を各参加者は強く認識したようであった。

—\*—\*—\*—

## 幕張夏期セミナーに参加して

一橋大学助教授 横田雅弘

異文化コミュニケーション論には門外漢といってもよい私のような者にも、この「大学における異文化コミュニケーション論の教育と方法」は、今まで私が出席したどのセミナーとも異なる“リアリティ”があった。実質

的にはほとんどまる一日プラスα程度の短いセミナーであったが、じつに「もうけた」のである（ある先生は「宝の山を掘り当てた」とまで形容した）。

なぜこのセミナーでこれほど「もうけ」させて頂いたかには、私なりにいくつかの理由が思い当たる。その第一は、このセミナーが、異文化コミュニケーション論に関する議論と、大学でどう教えているか、という具体的な方法論がともに明確に意図されて企画されていたこと。これによって、確かに論議を尽くすには時間的に不十分であったかもしれないが、終始大学の教室で教えるという我々にとっての現場からの議論が展開された。

第二に、そうは言っても、講師の諸先生が自分の宝である授業内容と方法をここまで開陳して下さらなければ、ひかりものも単なるメッキでしかなかったであろう。その心の広さに感謝申し上げたい。

第三に、それに触発されてかどうか、参加の諸先生方も我れ先にと開陳された。ワークショップの部屋全体がまさに講師（リソース・パーソン）で溢れかえていたのである。その勢いたるや、言うことのない私までもがなにやら発言してしまうほどであった。なるほど昨年の講師の先生方（御堂岡潔・遠山淳・石井敏）もみなさんご出席である。御堂岡先生は、なんと中国の研究旅行をこれがために切り上げて駆けつけたとのこと。「こんどはこっちがもらう番」だそうである。

さて、セミナーの内容から、このようにたくさんの収穫があったわけだが、特に私が触発されたのは、異文化間でのメタ・レベルのコミュニケーションに関する議論であった。実をいえば、もっとこの議論を深めたかった。しかし、どのようなメタ・レベルのコミュニケーションが異文化間の友人関係形成に働いているかという自分のフィールドでの興味が触発された。技術や芸術といったものだけでなく、日本で言う「はだがあう」あるいは「いきがあう」ということについても考えたい。それが異文化間ではどのように立ち現れるか、あるいは現れにくいのかという問題、そしてそれがその後の親密化をどの程度どのように規定していくものかという問題である。このセミナーをきっかけに、おもしろい研究計画が立てられればと思う。

最後に、事務局に何か不満のひとつでもないのかと言われれば、のんべえを代表してひとつだけ申し上げたい。ナイト・セッションとしてできれば、各自がどこかゆつくりと飲んで話せる場所を用意していただけると、これ以上脅かされてもすかさずされても何も言うことがないのである。周到なご用意をくださった神田外語大学異文化コミュニケーション研究所の皆様方に厚くお礼申し上げます。

[研究所より] 本年度も幕張夏期セミナーに参加された多くの先生方からお手紙を頂きました。残念ながらスペースの都合で掲載できませんが、当紙上を借りて心より御礼申し上げます。貴重なご意見やアドバイスは是非今後活かしたいと考えています。

## DOES THE AMERICAN WAY OF LEARNING MAKE RETURNEES "ABRASIVE" ?

Mariko Muro Yokokawa  
(Ph.D., Stanford University)

Although the primary function of schools is commonly seen as the transmission of knowledge, one of its chief underlying functions is the transmission of the value systems and customs predominant in the society where the school is located. Often the content of what is taught is not as powerful as the way this knowledge is transmitted or the way the classroom is conducted, the more so since this process is usually unconscious and believed to be natural and universal rather than culture specific. Through analysis of my year-long observations at the school which I will call "Rolling Meadows"(RM), located in an upper-middle class suburb in the Eastern part of the United States, I isolated patterns in "Teaching Practices" and "Discipline Methods" that may cause problems for Japanese students who return to a Japanese school (Muro, 1989).

### TEACHING PRACTICES

At RM, the teaching style is interactive and based on inductive thinking, "encouraging comprehension of higher principles underlying concepts" (White, 1987). Students are given considerable control over use of time and initiation of exchange with teachers. Teachers emphasize positive reinforcement but differ teaching strategies by ability level. This teaching style appears to encourage independence, self-motivation, assertiveness, and initiative in the students, who work hard for individual recognition and membership in higher ability groups. Let me illustrate this through the following example:

Mr. Thompson, one of the two male teachers at RM, is in charge of the top-level math class in the sixth grade. According to him, although the lower level math classes are 'super-structured', this class is given maximum freedom and four of the students work independently at their own pace, and help each other with their work. Mr. Thompson was explaining all of this to me during class, while the students were working hard on their own.

One of the boys comes up to ask a question about an angle. "Look up 'obtuse' in the book," Mr. Thompson says.

Another boy complains that he cannot finish all his work on time. Mr. Thompson replies, "That's not my problem if you have to do it tonight. It's yours."(Muro, 1989)

Giving the students maximum freedom and responsibility is a reward and an expression of Mr. Thompson's faith in them. Only those that are considered less competent are 'super-structured'. As in other upper-level classes, the teacher only spends a brief amount of time talking to the entire class, either to explain a new unit or draw out conclusions from them, and expects the students to initiate questions.

How would a child react if he returns to a Japanese school after experiencing this kind of class (as is quite common in math)? His "special abilities" are ignored and any attempts to bring attention to them is considered "conceited, self-centered, and disruptive to the harmony of the class." Then is the puzzling problem of how to understand anything without asking questions -- "In Germany,...not to raise your hand will be seen as 'not thinking at all'...How strange. I thought, 'maybe in Japan it is not good to express your opinion actively.'" (Naito, 1987). Finally, in Japanese schools students are highly structured regardless of ability -- treatment that was reserved for the less able in schools like RM and is thus insulting to a returnee who feels he is competent and deserving of more freedom.

### DISCIPLINE METHODS

The teaching of curriculum content is only part of what goes on in a school. Through a less conscious but more powerful process, children also learn from the way the teacher brings them closer to what s/he considers ideal behavior. At RM, the techniques of control go hand in hand with teaching practices in producing the ideal professional upper-middle class child -- one who is not only well-informed, independent, and full of initiative, but also calm, respectful, self-disciplined and self-policing.

The most striking impression of discipline at RM is the apparent ease with which it is maintained. Classes and even large assemblies quickly quiet down without much prompting. Control is maintained following similar principles as in teaching: student initiative and independence, as well as indirect elicitation of desired behavior, often using an elaborate system of rewards and demerits.

As can be seen from the example below, teachers also switch strategies by perceived ability level:

1) Mrs. Jenkins in her top level math class:

Mrs. Jenkins: - "It has taken 8 minutes to do a very simple thing."

- "Kimio. Haruko. You have to be able to hear Larry."

2) Mrs. Jenkins in her mixed (lowest level) reading class:

Mrs. Jenkins: - "Why should the class be noisy?"

- "Raise your hand, do not talk out of turn...When you talk out of turn, you are saying only one thing. You do not care whether anyone hears you or not. It's very impolite."(Muro, 1989)

Note that in her top level class Mrs. Jenkins only makes brief allusions to either what has objectively taken place or the reason to change the behavior, and does not state the desired course of action, as she does in the "mixed" class. It is significant that the usually open-minded Mrs. Jenkins attributes this difference to the "less motivated" students in the lowest class who "couldn't care less."

A Japanese returnee accustomed to such a system is likely to feel demeaned by the less individualized sanctions in a Japanese school, where questioning is seen as a mark of rebellion and punishment is handed out not so much for what is objectively "wrong" but for disturbing the harmony of the class. By behaving in ways they have been taught are "natural" and "good" in a society that values individual achievement, returnees unwittingly invite resentment in a society that values betterment and harmony of the whole group. Changing those behaviors can be excruciating if they have been educated in a culture where to compromise on one's values is to lose one's identity. Those that find returnee behavior "abrasive" should remember that these children have been trained to become "good natives" rather than "bad Japanese".

#### References

- Muro, Mariko. "Acquiring the American Way of Learning: The Cultural and Intellectual Assimilation of Japanese Children into an American Elementary School". Doctoral Dissertation, Stanford University, 1988. (Dissertation Abstracts, 1989).
- Naito, Chihiro. "Eigo ga dekiru kaigai - shijo no

gokai," Asahi Shimbun, March 13, 1987.

White, Merry Isaacs. The Japanese Educational Challenge. New York: Free Press, 1987.

## 学会・研究会予告

### 比較文明学会

日時: 1992年11月28日(土)・29日(日)

場所: 神田外語大学

シンポジウム・テーマ: 「21世紀への文明変動」

司会: 神山四郎(神田外語大学)

染谷臣道(九州工業大学)

報告者: 増田義郎(千葉大学)、西川潤(早稲田大学)、  
片倉もとこ(国立民族学博物館)、加藤九祚(創  
価大学)、神川正彦(國學院大学) - 28日(土)  
13:30~17:30

問い合わせ先: 〒261 千葉市美浜区若葉1-4-1

神田外語大学図書館内

比較文明学会第十回大会実行委員会

Tel.043(273)1233 ex.391,396

### 異文化コミュニケーション研究会 (SIETAR JAPAN)

1992年11月26日(木) Drs. Milton & Janet Bennet

12月3日(木) Dr. Margaret Pusch

12月12日(土) 荒木晶子(桜美林大学)

場所: 青山学院大学総合研究所10階18号室

問い合わせ先: IIBC

Tel.03(3580)0286

Fax.03(3581)5608

## 研究所からのお知らせ

- ・サンフランシスコ州立大学のディーン・バーンランド教授が7月14日肝臓障害で急逝されました。異文化コミュニケーションの分野で屈指の理論家として日本でもよく知られた方を失い誠に残念で、損失は測り知れないものがあります。謹んでご冥福をお祈りします。
- ・研究所図書室では、異文化コミュニケーションに関連した図書、論文、紀要等を広く収集し、資料センターとしての機能を充実したいと考えています。これまでに、多くの貴重な資料をお送り頂いた方々に心より御礼申し上げます。今後寄贈図書につきましては当ニュースレターでもまとめて紹介させて頂く予定です。
- ・各種研究会のお知らせ、関連分野に関する情報並びに当ニュースレターに対するご意見等がありましたら、ぜひ下記までお寄せ下さい。

〒261 千葉市美浜区若葉1-4-1

神田外語大学

異文化コミュニケーション研究所